

# 「島」にとって教育投資とは何か

仕送りに命をすりへらした父

## 渡辺幸重

手元に十数年前の「金銭出納帳」がある。開くと、つたない字で

9月4日 カレー粉25円、たまねぎ28円、じゃがいも19円、肉35円、パン30円、ラーメン20円

5日 父から1万円、パン40円、アイスクリーム20円、缶詰55円、部屋代4000円、水道代150円、電気料450円、ガス代270円、……

などと書かれてある。

### 島から都会へ

この「金銭出納帳」は、私が中学3年生の時、高2の次兄との自炊生活のなかでつけたものである。私は、1965年（昭和40年）の春、島（鹿児島県熊毛郡屋久町）を出、鹿児島市内へ移った。「島で百姓するものではない」「苦勞して働いても一銭にもならん」「都会で楽な暮らしをしろよ」——叔母はよく私にこんな言葉を繰り返した。とにかく都会へ出て出世しろ、島に帰ってくるものではない、と。「自分は島で百姓しているのに、なぜ自分のことを悪く言うんだろう」——子供の私は少し反発を感じながらそう思った。が、まわりを見れば、島の二男、三男は大きくなれば島を出るということが、あたり前のことに思えた。私の父親は「家を継ぐ者はなくてもよい」と言った。実際、長男まで島外に就

職し、帰ってきそうもない家庭はいくらでもあった。

学校の先生は「この小さな学校で1番になっても、隣の学校にはもっとできる人がいるぞ」と言い、島でよい成績をとると「鹿児島に行ったら下の方だ」と言った。だから、父親が「どうせめざすなら東大にしろ」と言った時には素直に「うん」と答え、ラ・サール中学の編入試験に2度失敗し、父親が「都会の中学でもまれた方がよかろう」と私を鹿児島の中学校へ転校させようとした時も当然のこのようにそれに従った。「島の人間でも優秀な人間のいることを見せてやる」と誓い、「離島苦」からの脱出を図ろうと——。

### 借金に頭を痛めた自炊生活

次兄がクラブ活動で帰りが遅いので、自然と炊事当番は私に回ってきた。朝の6時ごろ、目覚時計のベルがけたたましく鳴る。重たい布団から私の手が伸び、ベルを止めると同時に枕元の電気炊飯器のスイッチを入れる。ご飯が炊けたころ起き出してみそ汁と2人分の弁当を作り、あたふたと朝食をすませた後、私は朝の補習に遅れないように学校へ急いだ。

14歳の私の頭を悩ませたのは夕食の献立だった。帰宅後あれこれ考えているうちに寝込んでしまい、気がつくとスーパーの閉店間際。走っ

て行ってやっと間に合ったということもよくあった。ある日、金がなかったのか、献立を考えるのがいやだったのか、夕食にインスタントラーメンを作ったことがあった。卵やキャベツを入れるなどの工夫はしたと思うのだが、帰ってきた兄は、開口一番「ラーメンが晩めしになるか！」——怒られてしまった。“こんちくしょう”と思いながらひぎをかかえて涙をこらえたことを今でもはっきりと思い出す。金がなくなったので貯金箱をかかえて夕闇のなかをパン屋に走り、店先で一円玉を積み上げながらパンを買ったことも——。

当時は月に約2万円の送金をしてもらったらしい。その額は余裕のあるものではなく、炊事担当の私は、弁当も含めた1日の食費を100円以内に切り詰めようと努力した記憶があるのだが、金銭出納帳を見ると必ずしもそうはなっていない。当然のことながら、予定外の出費があったり送金が遅れたりすると金がなくなる。そんな時、きまって私が近所の同郷の先輩に1000円の借金を頼みに出かけた。その先輩も金がないというので100円でもいいから貸してくれ、と頼んだこともあるが、借金を頼むことぐらい、いやなことではない。実は鹿児島市内で叔母が食堂を営んでいるので、そこへ行けば確実に借金ができるうえに食費も1食分浮くのだが、借金がいやなのでぎりぎりまで送金を待ったのだろう。叔母のところへ行く電車代もなかった。借金もできずすきっ腹をかかえたまま寝たこともあった。

#### テストが支えの“異邦人”

学校では“越境”でもあり、鹿児島弁をうまく使えないこともあって自分から級友に話しかけることはなかった。級友に「君のうちに遊びに行こう」と言われると、私はどう断わろうかとどぎまぎした。私は、自分が“異邦人”であることをわきまえているつもりだった。ただ、学校から帰る途中に見る他人の家の障子に映る裸

電球の色が、アパートの蛍光灯に比べてやけに温かく感じられた。島の裸電球の生活の時には都会の“文明的”な蛍光灯の生活にあこがれていたはずなのに、やはり、障子に映る柔らかな明りの向こうにある家庭の団らんにはひかれたのだろう。

そんな自分を支えてくれたのが、テストだった。どこでどう生まれた人間であろうと、取った点数がそのまま成績になる。テストだけは平等だと私は信じた。ある時、クラス担任がいつになくニコニコとうれしそうな顔で教室に入ってきた。曰く「とうとうこのクラスから学校で1番が出た。それは渡辺君だ」。その時クラスのみんながどんな顔で私を見たかまったく覚えていない。ただ、私がいよいよ成績をとったからといって、なぜにこんなにも担任が喜ぶのか、とても不思議でならなかった。私がとった成績を他人の担任がなぜ喜ぶのか——それほど私は自分を“異邦人”化していた。

#### 5人の教育に力尽きる

「金銭出納帳」を見るまでもなく、ふっと立ち止まれば当時の体験が湧き水のごとく思い出されてくる。だが、その類の体験は、島で生まれた人間なら誰でも多かれ少なかれもっている。当時はまったくあたり前のこととして受け入れていた。むしろ、成長するにつれて考えるようになったのは、子供を都会に出し、少ない収入のなかから教育費、生活費を送った側のことだ。「金銭出納帳」を見ても、送金がひと月分まとめて送られてきていることは少ないし、部屋代を支払う月末の送金が翌月にずれ込んでいることも多い。そこにも送金する側の苦勞がしのばれる。

私の父は常々「高校までは親の責任だから私にかせる。大学は行きたかったら自分の力で行け」と言っていた。が、実際に5人の子供が大学に行く年齢になると、死にものぐるいで働いて学

費、生活費を援助した。父が毎年の初めにメモしていた“経営設計”によると、高校生の長兄と次兄が鹿児島市で自炊生活をした昭和39年は、一家の全支出（年間）61万円のうち仕送りが24万円（全支出に占める割合39%）だったのが、44年（大学生2人、高校生2人）には42万円（同44%）と増え、45年（大学生2人、高校生2人）にはピークの88万円（同88%）に達した。この45年3月に長兄が大学を卒業、翌46年3月には次兄が大学を卒業し、やっと楽になると感じたその年の10月、肺ガンに倒れ、12月に死んだ。52歳。私は大学2年生、末弟は高校2年生。「末の子が大学を卒業するまで、あと5年は死ねない」と言いながら死んでいった。私は涙を流さなかった。泣けば“負け”になる。父は負けて力尽きたけれど俺は絶対に負けない、負けてなるものか——と悔しさを飲み込んだ。

#### 「やっとの思い」の現金の行方

私は、日本育英会や町から奨学金をもらったほか、家庭教師から建築現場の仕事までさまざまなアルバイトをやったが、それを苦しいとかいやだとか思ったことはない。むしろ、大学へ行けた私たちは幸せな方だった。

島は物価が高い。島で売られる商品のすべてに運賃がかかっているからだ。逆に、島の生産物は運賃の分だけ安く売らなければ都市周辺の生産地に太刀打ちできない。しかも、現金収入につながる産業が少ない。昭和45年度の九州の離島全体の純生産額（就業人口1人当たり全産業）は、九州全体のその60%にしか達していない。「先生が中学（旧制）へ進ませてくれと親に頼みにきても尋常高等小学校までしか出してもらえなかった」とよく話した父や母の時代はむろんのこと、私たちの時代でも、子供を高校、大学まで出すのは大変な事業だった。父は現金収入を得るため、農業を営むかわら、精米や脱穀、さらには鮮魚・精肉店までさまざまな仕事

に手を出した。前述の経営設計を見ると、赤字が見込まれる年が何回もあり、「豚を我が家で飼育し、精肉を全面自給することで利益を高める」などと赤字解消策が書き込まれている。

当時の島の生活を「林業金融基礎調査報告——鹿児島県屋久島——」（昭和38年、全国森林組合連合会等）は次のように伝えている。「県立屋久島高校生（寄宿生）への仕送りでも年間7～8万円、鹿児島市内の高校に出すと仕送りは年10万円を下らず、残った家族はほぼ1戸8万円くらいの現金で生活する」さらに「年間10万円以上の支出をまかないいう農家は少なかった」とあるから、進学させたくても進学させられない家庭は多かったことだろう。それでも、無理してでも教育を受けさせようとする親の意志は強く、同報告の「子弟の教育費に現金支出の大半が使われるようになった。現金支出の恐ろしさは、かつての医療費から教育費に転じたわけである」という指摘も大げさではない。

#### 地元に戻元されない投資

そのようにして送金を受け、大学を卒業した私は今、静岡で仕事をしている。いわゆる“高等教育”を受けた島の出身者の多くは、都市およびその周辺で島と関係の薄い仕事についている。額に汗し、血の出るような思いをして送り続けた“教育投資”はいずれ島や地方に戻元されるか、あるいは過去、還元されたことがあっただろうか——と問いを發し、問題を投げかけたのは、瀬戸内海の島の出身者であり、民俗学者の故宮本常一氏である。氏は『日本の中央と地方』（宮本常一著作集2、未来社）のなかで次のように述べている。

郷士（注：鹿児島県の）が明治になるとそれぞれ子弟を東京にやって教育を受けさせることにした。もとよりその生活は苦しいものであったが、それでもわずかばかりの送金を続け、子弟が学校を卒業して独立すると子弟

のもとに移って郷里を捨てたものが大半にのぼっている。

明治中期になると一般農民のうち比較的財産のある地主層や商人たちも見習うようになる。このようにして地方における経済的蓄積は子弟勉学の資として東京へ吸収せられていくのである。

上のような例を挙げたあと、宮本氏は昭和36年7月ごろ、地方小都市、農村出身の学生が家からもち出す金は430億円は下らぬと試算したうえで「これらの金は地方に回収されるものであるか」との問いを發し、「地方にとってほとんど利潤を生まない投資なのである」「教育投資はそれぞれの家にとっては子孫の生活を安定させるものとして有利であろうが、地方にとっては決して有利な投資ではない。しかも、それを明治初年から今日までくり返してきた」と断じている。

前述したように、私は「島の間でも優秀な人間のいることを見せてやる」と誓って島を出た。が、今にして思うと、それは“島はダメなんだ”という意識の裏返しにすぎない。たとえ、島から教育投資を吸いとって“優秀な人間”になったところで、「よくそんな小さな島から立派な人間が出ましたね」と変に感心されるだけで、苦しい教育投資に比べ、島に対して大した利益にはなっていないことを実感する。

#### 大学生1人に年80万円以上の送金

近年、物価、学費とも値上りを続けている。文部省の「55年度学生生活調査」によると、下宿・間借りしている学生の年間生活費(支出)は国立大学で100万4600円、私立大学で138万200円といずれも100万円以上。家庭からの仕送りは、国立大学82万3700円、私立大学111万4800円で、仕送りをする側の年収は平均で約600万円となっており「国立だからといって低い年収でもと

いうわけにはいなくなってきた」(1981年12月20日付毎日新聞朝刊)と報じられた。これらは学生1人当たりのデータであり、大学生を2人以上持つ家庭からの仕送りはさらに増える。

私は現在、静岡の予備校で進学指導を担当しているが、全国でも比較的豊かだとされる静岡においても「私大は受験しない」という生徒が目立ってきた。不況で収入が伸びないうえに、学費、生活費の負担が大きすぎるといふのだ。福祉が充実すれば家庭の経済状態によらず進学が保障されるはずなのに、近年、その逆の現象が進んでいる。これまで島や過疎地で強く感じていたことが全国に広がりつつあることを実感する。

#### 始まった“島興し”

以上のような問題は、単に教育制度だけでなく、日本の中央集権主義的な政治、経済のしくみと無縁ではない。今日、生産性を第一義とする日本経済は、国際的には貿易摩擦、国内的には産業間の不均衡発展に象徴されるように、構造的危機を迎えている。にもかかわらず、不幸なことに根本的解決を図る気配はなく、農業などの弱い産業の切り捨てと、“基幹産業”を支えるエネルギーの確保で乗り切ろうとしているようだ。このままでは、地方では多くの産業がこれまで以上の打撃を受けるだろう。過疎対策として、都市では嫌われる原子力発電所、エネルギー備蓄基地、核再処理工場などが押しつけられ、それ自体の問題性と“迷惑料”としての一時的かつばく大な補助金のために、地域社会がまったく独自性のないものになってしまう。大型プロジェクトにもれた過疎地では、過去にもあったように“無人化”政策が進むであろう。

一方、これらの動きに抗し、人間らしく生きる地域社会を作ろうという“島興し”<sup>しまおこ</sup>“地方復権”の運動も、徐々にではあるが広がりつつある。石油基地に反対する奄美の人や奄美出身の若者

たちは、押しつけの大型プロジェクトによらない“島興し”に真剣に取りくんでいる。沖縄では、二足三文で観光企業に買収された土地を買い戻す運動が進んでいると聞く。諦めと都市なみの生活という一抹の夢を持って“御上の政策”<sup>みかみ</sup>を無批判に受け入れてきた地方にも、確実に変化が訪れている。ある雑誌に「最初のUターンは、都会での挫折から。次はふるさとがなくなるといふ危機感だった。今度は、あたりまえのこととしてUターンできるようにしたい。それが島興しなんだ」と島の若者が語ったとあるが、象徴的な言葉だと思う。このような動きが今の社会のしくみを変えるひとつの力になっていくだろう。

#### 「小さな、新しい大学」への夢

運動のなかでよく、島や地方の歴史や考え方を学習する活動も行なわれている。このような学習活動を島や地方で発展させることで集落単位の小さな、新しい大学が作れないだろうか——と考えたりする。というのは、“島興し”や“地方復権”にかける若者が核となって、そこで、昔の風俗や自然、歴史、地域の特性を生かした産業から文学、経済まで学ぶことができれば、島や地方で誇りを持って生きようとする若者には“ほとんど利潤を生まない教育投資”は必要でなくなるだろうからだ。そして、都市で“優秀な人間”になる幻想、教育投資と引き換えに押しつけられようとしている大型プロジェクト、地域社会の破壊に抗するために。

小さな大学それぞれが独立し、かつ連帯する大学の名は、島尾敏雄風にたとえて言えば「自立と交流、連帯のヤポネシア大学」。これまた幻想だと読者諸氏は笑うだろうか。

わたなべ・ゆきしげ氏

1951年、鹿児島県屋久島生まれ。鹿児島・鶴九高校、東京大学(教養学部基礎科学科)へ。卒業後毎日新聞社記者を経て、現在、静岡市内の子備校に勤務。